

現代ことば遣い小考(六):
国語を教えるものの自戒のために

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 秋正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007173

現代言葉遣い小考（六）

― 国語を教える者の自戒のために ―

後 藤 秋 正

今回をもって、一旦この連載を休むことにする。

いつこの駄文を終わりにしようかと考えていたのだが、ごく稀ながら面白がつてくださる方もいたので、ここまで続いてしまった。とりわけ、年に一・二度立ち寄らせていただくと共に有意義なお話を聞かせてくださる、神田・神保町K出版の尊敬するY社長は、「論文はともかく、あの文章はまだですか。」（御本人はそんなことは言わないと否定なさる）などと催促してくださった。これもきつと励ましたのだ。

- ①『角川古語大辞典』の広告（毎日新聞朝刊、一九九九・六・二）
- 「40年の歳月をかけて、ついに完成！新しき古語の原典ここに誕生。」

「原典」は、「引用・翻訳・改作などのもとになった書物」（『辞林21』）。『諸橋大漢和辞典』『漢語大詞典』には見えない。辞典は、原典に基づいて語彙を抽出し、それに解釈・説明を加えたものだろう。それを「古語の原典」と言うだろうか。

内容は「現在望み得る古語大辞典の極み」だそうだ。

- ②細野不二彦『ギャラリーフェイク6 五爪の龍』（小学館ビジュアルコミックス、一九九六・一）

- 一四四頁「小姑!!お酒お酒。」

上海の骨董品店主が、バーの若い女性に向かって言ったせりふ。この「小姑」に「シャオジエ」とルビが振ってある。ルビが正しいとすれば、「小姐」の間違い。一三三頁「巨大な組織力」は誤植。一六七頁、人民解放軍大佐の名前「湯裕」に「タンジュウ」とルビが振ってあるのは、せめて「タンユイ」としてほしい。また、第八巻の四七頁の「出々宗覚」に「とつとつそうかく」とルビが振ってあるのは、漢字のほうが「咄咄」でないといけない。箱書の絵にはそのようになってる。第13巻一五一頁「けんけんがくがく」は、「かんかんがくがく」の、同じく一六八頁、レクチャーとルビが振ってある「講議」は、「講義」の誤り。第14巻三一頁「社行辞令」も明らかにミス。とはいえこの漫画、ゼミの学生に勧められて読み始め

たらなかなかやめられず、にわか美術・骨董商になった気分。同じ作者の『リザベーション・ブリーズ』全二巻も、ついでに読んでしまった。

③「風鈴」(毎日新聞夕刊「憂楽帳」一九九九・六・一四)

●「(仏領マルチニーク島は) フランスパンとパリ風コーヒーが飲める唯一のカリブの島というのがキャッチフレーズだ。」意味を考えればすぐに分かるとはいえ、これではフランスパンも飲めることになってしまわないか。述語を節約するためなのだろうか、このような言い回しもしばしば目にするようになった。

④『中学国語2』(教育出版、一九九八・一・二〇発行)

●一五三頁「武陵の漁師がある日、漁に出て谷川を逆上っていくうち、迷ってしまいました。」

「桃花源」の始めに近い一節。原文では、「武陵人、捕魚為業。緣溪行、忘路之遠近。」(武陵の人、魚を捕うるを業と為す。溪に緣うて行き、路の遠近を忘る。)に対応する部分。生徒たちは「さかあがつて」と読んだのだろうか。以前にも書いたように「溯る」または「遡る」としなければならぬし、これらが常用漢字ではないので使えないというのなら、平仮名にするべきだろう。ところが念のためと思って『辞林21』を引くと、「さかのぼる【逆上る・遡る】(動五)」とある。この表記は容認されたのだろうか。コピーを送ってくれた卒業生のI・Hさんの手紙には、「教科書会社に電話するのも面倒で、毎年、『教科書も、こんなまちがいをするんだね』

と生徒に教えてきました。」と言う。筆者のワープロは「さかのぼる」として変換キーを押すと「遡る」「溯る」は出てくるが、「逆上る」は出てこない。教科書の文章は、「漁師は困ってあちこちへと船を進めていくうちに、思いがけず桃の林にでくわしました。」と続く。漁師は谷川にそって船を進めていったのだから一本道(一本川?)であるはずなのに、「あちこちへ」というのも何やらおかしい。

その後、日本語学のB先生に尋ねたところ、『現代国語表記辞典』(三省堂、八五・九)を示された。これにも「さかのぼる」の項に、「逆上る 川の水が逆上る」とあり、参照項目として「さかのぼる【遡る】川(時代)―をさかのぼる過去(根本)―にさかのぼる」とあって、「遡る」には常用漢字表外の漢字であるむねの記号(▲)が付され、「溯は異体字」であると記されている。この説明も、川(の水)が逆流する場合には、「逆上る」を用い、(人や船が)川を上流に向かってゆく場合には「遡る」(書くときには平仮名)を用いるといっているように読めるが、どうもはつきりしない。いつから「逆上る」という表記が用いられたのか調べる必要があるようだ。

⑤「食卓の王様 サクランボ」(NHKテレビ、一九九九・六・二五、夜一〇時半ころ)

●「うわぁー、ジュズなり。」

巨大なハウスの中で、みごとに実をつけたサクランボを見て、進行役のジュディー・オングが発した言葉。「鈴なり」

と「数珠つなぎ」を混合したみごとに新造語？

⑥「ニューヨークからのレポート」(ラジオ深夜便、NHKラジオ、一九九九・七・七、深夜零時半ころ)

●「救急車の出動を要請する電話が百二十三ツウかかった。」

山崎コウセイというレポーターの報告。この日、ニューヨークは三十八度を越える今世紀最高の気温を記録したとのこと。電話の回数を数えるのに、ツウ(通?)と言うだろうか。通話と混同したか。このレポーターは、「きしくも」(奇しくも)。「奇しは、不思議だ、奇異だの意」。「かつて」(嘗て)とも言っていた。「アメリカインディアン」と言った時には、聞き手の女性アナもさすがに不適切な表現だと判断したらしく、「アメリカ先住民ですね」と、言い直していた。

⑦駒田信二「漢字読み書きばなし」(文春文庫、一九九四・一一)

●九七頁「始め処女の如くなれば、敵人戸を開く。後に脱兎の如くなれば、敵拒ぐも及ばず。(始如処女、敵人開戸。後如脱兎、敵不及拒。)」

「始めは処女の如く」と題するエッセーの末尾に引用された『孫子』九地篇の一節。この言葉を新聞のコラムが誤った意味で用いている、というのだ。しかし、些細なことのようにだが、「敵拒ぐも及ばず」は、「敵拒ぐに及ばず」(敵は防いでいるゆとりもない)と読んでほしい。「敵拒ぐも及ばず」ならば、原文は「敵拒〔而〕不及」となるはずで、これではせっかく原文を引用した意味がない。

⑧佐藤達郎「後漢の献帝」(「しにか」一九九九・七)

●三一頁「(献帝は)漢王朝の最期にふさわしい名君といえよう。」

二八頁には「漢王朝の残映を担いつつ王朝に最後の幕を引いた献帝」とある。「最後」と「最期」の使い分けについて、後者は人の死をいうものだと思然と考えていた。『辞林21』は、「【最後】①物事の一番おしまい。……【最期】死にぎわ。臨終。末期。」という。ところが、『諸橋大漢和辞典』の「最後」を見ると、「①いちばんあと。事物の終り。最終。【漢書、張禹伝】最後出而尊貴。②命の終る時。死にぎわ。最期の②に同じ。【太平記、二十一】抑最後の一念に依て。」とあり、「最期」のほうには、「①最後の時。をはり。はて。【宇治物語、三條殿発向】②命の終る時。いまはのきは。まつこ。臨終。【狭衣、三上】この尼君の最期に逢ひ侍らむずれば。」とある。すると、わが国の古典においては、最期と最後を区別してこなかったのだろうか。ちなみに、『漢語大辞典』には、「最後」はあっても「最期」はない。

⑨細野不二彦『ママ』(小学館ヤングサンデーコミックス、一九八八・一一)

●二〇一頁「さりげで／(香水を)つけてくるところなんか／さっすが／床屋の息子だね」

「なにげなく」を「なにげに」と言う例についてはすでに述べた。これは高校三年生同士の会話。「さりげなく」も、このように言うのだ。しかもこの香水を「香水をつけている」とは言わずに、「やっぱ香水してるう」と言うところが現代

高校生的である。一九七九年にデビューした作者の細野不二彦は、高校生の言葉遣いをかなり勉強？しているのだろう。

- ⑩ 鈴木虎雄『中国戦乱詩』（筑摩叢書一一九、一九六八・一一）
● 二一八頁「艦船は曇曇と珠数だまのようにういている。」

「珠数」は数珠の誤植。念のために原本である『禹域戦乱詩解』（弘文堂書房、一九四五）を見たら、歴史的仮名遣いにはなっているものの、表記は同じだった。誤植も踏襲されてしまったのだ。ちなみに、出久根達郎『本箱の隅』（リオリオ出版、一九九九・一）の二八頁には、「千歳通りは車が数珠（じゆず・この漢字を書く時、いつも上下を間違えてしまう）の如くつながり、……」と言う。確かに「珠数」を音読みすれば「シユスウ」で、ジユズに近いから、このように書いてしまいうさだ。

- ⑪ 「スルメイカ」（『毎日新聞』一九九九・八・三朝刊「生活・家庭欄」）

● 「イカは烏賊と書くが、これは中国の古書『南越志』からの出典。」

「……からの出典」はおかしい。「……が出典である」、または、「この出典は……である」と言った方がいい。『漢語大詞典』を見ると、『初学記』に引く沈懷遠『南越志』を出典として引いてある。原文は以下の通り（『初学記』中華書局、一九六二・一に拠る）。「南越記〔志〕曰、烏賊魚、一名河伯度事小史、常自浮水上、烏見以為死、便往啄之、乃卷取烏、故謂之烏賊。」（南越記〔志〕に曰う、烏賊魚、一名は河伯度

事小史、常に自ら水上に浮かぶ、烏見て以て死せりと為し、便ち往きて之を啄ばまんとするに、乃ち巻きて烏を取る、故に之を烏賊と謂うと。）賢いイカは、死んだふりをして烏を餌食にしていたわけだ。ただし、現代中国語では、普通は墨魚と言うらしい。

- ⑫ 「押し花王」南の島決戦（TVh、一九九九・八・一二夜八時から）

● 「Aさんがダントツのトップ。」

ナレーターの説明。ダントツは断然トップの略だから、これはおかしい。NHKラジオの野球中継でも「キャッチャーが大きく後ろに後逸」などとやっていた。

- ⑬ 「交通安全キャンペーン」（NHKラジオ、一九九九・八）
● 「これからも自分のスピードに過信せず、安全運転に励んでください。」

北島三郎など、北海道出身の芸能人を起用して、交通安全を呼びかける数分の番組。しばらく前から続いているようだ。これは元スキー選手の川端絵美がスピードの出し過ぎを戒めるもの。「スピードに過信する」とは、何を言っているのかわからない。「過信」は、「信じすぎる」の意だから、「自分のスピード感覚（または運転技術？）を過信するな」というのならわかるのだが。

- ⑭ 紀田順一郎『第三閲覧室』（新潮社、一九九九・七）
● 一三八頁「琢木」

九一年の『魔術的な急斜面』以来、久々の古書ミステリー。

装幀も凝っている。だが、このような誤植があるのはいたたけない。二四三頁「痛く」は、漢字で表記するなら「甚く」だろうし、二六四頁の紙博士のせりふ「凝っては思案に能わず」は、文法的にもおかしいうえに、何を言っているのか意味不明。というわけで、やや興を削がれた。

● ⑮青木正美『古本探偵覚え書』（東京堂出版、一九九五・九）

● 一八六―一八七頁「映画館とというのが分かる……」

これは、二六六頁「隣に越して来のが大学生兄妹で……」と同じく誤植。それにしても、この本だけではないが、書名の「覚え書」は、「覚え書き」か「覚書」ではないかと気になっ
てしまう。

● ⑯フリーマーケット会場の貼り紙（「サッポロさとりんど」、一九九・九）

● 「文庫本30円単庫本50円」

敬老の日に、好天だったので出かけてみた。娘は「サザエさんうちあけ話」を百円で購入して、ニコニコ顔。誰かのエッセーに単行本の意味を知らない若者が増えてきた、と書かれていたが、さもありなん。

● ⑰高村薫「父が来た道」（『地を這う虫』所収、一九九九・五）

● 一六一頁「上からの無下な圧力で改ざんを強いられた……」

『辞林21』には、「むげに【無下に】やたらに。むやみに。すげなく。」「断れない」とあるが、どれにも該当しそうもない。ここは、不当な、強圧的ななどとするところだろう。彼女の推理小説はたまに読むのだが、このような言い回しが

時に目につく。一八三頁「手帳の方を返すがえすめくり始めた。」の「返すがえす」の用法も違和感あり。

● ⑱「土曜はいいじゃん」（HBCラジオ、一九九九・九・一八夕刻）

● 「有名人もゴヨウタツの店」

当別町のNラーメン店が札幌市内にも進出したことを知らせるレポーターの言葉。ご用を足すのだから、ゴヨウタシであって、ゴヨウタツは誤用だと思っていた。ところが小生のワープロでもごようたつと入力すると御用達と変換されるし、『辞林21』にも「ごようたつ」「ごようだち」とも」とあるではないか。思い違いだったのだろうか。

● ⑲八木福次郎「社会萬般番附大集」と近藤蕉雨のこと（『古本屋の回想』東京堂出版、一九九四・七）

● 一五二頁「当然話は『風俗画報』を中心に展開し、『岡本綺堂日記』を編集された岡本氏は、その日記のなかに近藤蕉雨という人が出てくることが話題になった。」

主語と述語が対応しない。「増加続ける古書目録」の一六六頁「今まで店売りだけで通信販売をやっていた店が、こうした風潮に刺激されて目録を出すようになった店もある。」も、「店が」「店も」と重複して目障り。前にも引いたが、著者は長年にわたって「日本古書通信」の編集に携わってき
た人。永井荷風、小金井喜美子（鷗外の妹）らの思い出話や、札幌・小樽の古書店の話もあって楽しいのだが、こういう文章が頻出する。三〇七頁「心気一転」は心機一転。

②〇BSニュース(BS7、一九九九・九・二二午後一二時五〇分から)

●「(台湾の南投県では)山崩れで橋が寸断されるなど、交通網にも大きな被害が出ている。」

「寸断」は、「細かに断ち切ること。ずたずたにすること。」だから、一本につながっている長いもの、例えば道路、鉄道などに言うのならわかる。それを橋に言うだろうか。あるいはかなり長い一本の橋があちこちで断たれたのだろうか。

②①開高道子「ワンダーランド眩く」(『父開高健から学んだこと』文芸春秋、一九九四・一二)

●三七頁「無我無中で先へさきへと歩いているうちに、……」

これは「無我夢中」。それにしてもタイトルの「眩く」は何と読むのだろう。「まばゆく」? 「くるめく」? ただ、彼女の自然描写はほれほれとするほど美しい。

②②平井徹「垓下から烏江へ」(『新しい漢字漢文教育』第二七号、一九九八・一一)

●一〇五頁「盟友桑原武夫氏が同じタイトルで吉川氏に反駁を試みており、最も論を展開している。」

注(4)の文章。この「最も」は、文意からして「道理に合っていること。当然であること。」(『辞林21』の意味だろうから、漢字で書くのならば、「尤も」でなくては。ただし当然、「最」に最高にすぐれたものという意味はある。「七言絶、以太白・江寧為最。」(七言絶は、太白・江寧(王昌齡)を以て最と為す。)のように(『詩薮』内編卷六)。しかしこの場合でもサイであつ

て、もつともとは読まない。

②③細野不二彦『ギャラリーフェイク17』(小学館ビッグコミックス、一九九九・一〇)

●二二〇頁「根付は酒脱とユーモアあふれる日本独得の工芸品である。」

洒落を洒落、洒脱を洒脱とやる。よくあるミス。

②④「金八先生三年B組」(HBCテレビ、一九九九・一〇・一四夜九時から)

●「瓜田に沓を直さず」

金八先生がB組の生徒たちに語りかけた言葉。「李下に冠を正さず」に続いてこのように言う。せりふだけでは視聴者にわかりにくいと思われるだろう、この部分は縦書きのテロップで表示された。「瓜田で」だったかもしれない。意味が通じないことはないが、「瓜田に履を納れず」としてほしかった。出典は劉向『列女伝』卷六弁通伝、斉威虞姫の条の「瓜田を経て履を躡かず、李園を過ぎて冠を正さず」。古楽府「君子行」にも似た句が見える。翌日の講義の時にこの番組を見たかと聞くと、一・二年生対象の講義でも三・四年生対象の講義でも見た者は三・四人しかおらず、ビデオにとった者が一人だった。教育系大学の学生たちの関心もこの程度なのだ。

「瓜田に……」と対になる言葉、「李下に……」を知っているかと尋ねたら、うろ覚えの三年生が一人いたのみ。

②⑤姉小路祐『死の逆転—京都が危ない』(角川文庫、一九九三・一一)

●四三頁「土地転がしって、濡れ手に泡の儲けね」

女房殿が読んでいて発見。正しくは「濡れ手で粟」。意味を考えずに書くところのようなことになる。あるいはこれもバブル（泡）泡沫的な投機的現象）経済崩壊の余波か。

②⑥細野不二彦『BLOW UP!』巻二（小学館ビッグコミックス、一九八九・一二）

●八八頁「ち、ちよつとそれはかんべん!!」

細野作品に時おり見られる表記。会話では「ちよ、ちよつと」と言うのが普通だろう。

●一四八頁「いまだ未定」

「いまだ未だ定まらず」となってしまうが、会話ではよくあることか。

②⑦大木康「進士及第まで」（月刊「しにか」大修館書店、一九九九・九）

●三一頁「進士」題名碑の碑面は損傷がひどく、昨今の所詮酸性雨のために劣化はますます進んでいる……」

この「所詮」がわからない。「所謂」の誤植か。

②⑧「枯葉」（鶴ヶ谷真一『書を読んで羊を失う』白水社、一九九九・一〇）

●一二頁「丹念に木の葉を本の間にさしはさんでいた、さも克明そうな人物にたいして、……」

伊藤仁齋『童子問』に、二・三丁ごとに木の葉が挟まれていたのを「いとわしい」ものにして、窓から投げ棄てたのが、荷風の随筆『冬の蠅』所収の「枯葉の記」を読んで、銀杏や

朝顔の葉は紙魚を防ぐためだと知った、というのが大意である。しかし、人物について克明など言うのだろうか。『辞林21』には、「こまかく、くわしいさま。丹念。」とある。『大漢和辞典』には「①十分に明らかにする。又、十分に明らかにすること②よく君たる道を尽くす。」とあって、いずれも出典として『書経』を引く。『漢語大詞典』は、この①を細分して「①克明、能明。後亦用作歇後語、謂任用賢能之士。②能察是非。」と言う。歴とした漢語なのだ。やはり、人の性格を克明というのは不自然なのだ。

②⑨出久根達郎『仕合せまんまる』（中央公論新社、一九九九・一二）

一一）

●二〇頁「これでは不親切きわまる。」

「きわまる」も「きわまりない」も、両方とも言いそうだが、前者は動詞、後者は形容詞という違いがある。はて、どちらが正しいのだろう。「感極まる」とは言うが、「感極まりない」とは言わない。「危険極まる」「危険極まりない」は、両方とも成立するのだろうか。「不親切」「危険」はこの場合は形容動詞で、どちらも「極まりない」と続いたほうが自然な言い方に感じられるのだが。

●三〇頁「この世に生を受けて以来、……まさか自分の存生中に……」

「享けて」「生存中（在生中?）」だろう。この著者の本は古書店で定価以下で売られていなければ買わないことになっていたのに、いわゆる新古書店にまつわるエッセーも載ってい

たので、つい買ってしまった。すると案の定、他の自著の「あとがき」が五篇も収められていて、また損をした気分になってしまった。迂闊だった。

- ③②「教員養成審の答申要旨」(「毎日新聞」夕刊、一九九九・一二・一〇)

●「現職教員を大学の教員として積極的に受け入れることが可能となるよう人事交流のあり方や、大学教員を学校の非常勤講師として活用する。」

「大学と教育委員会などとの連携方策の充実」の項の「具体的方策」を述べた②の部分の要旨。これでは「人事交流のあり方」を「活用する」となって、まったく意味が通じない。推敲をしていないのだろう。

- ③①「まとめ買いして、食わずに残し、あとで捨てれば、ケチすたる」(おめでた文芸「おりこみどい」NHKラジオ、二〇〇〇・一・二、夜七時半ころ)

●「……ケチの風下にもおけない、」

聴取者から寄せられた「まくあけ」の四字を詠みこんだ、はじめに引いた都々逸を選んで読みあげたゲストが言った言葉。「風上にもおけぬ」ならば知っているが、これはいったい何を言いたかったのだろう。

- ③②「卒業論文」中の誤字の一例(二〇〇〇・一)

●「通加」「欠け離れた」「慢遊」「覚後」「幣害」「実積」「追い遣る」「移り返わる」「発輝する」

それぞれ、「通過」「懸け離れた」「漫遊」「覚悟」「弊害」「実

績」「追い遣る」「移り変わる」「發揮する」の誤り。卒業論文が薄くなったこともさりながら、誤字が目立つようになったことも件の如し。これはほんの一例。

- ③③S大学「漢文学Ⅱ」レポート誤字の一例(二〇〇〇・一)

●「有明な」「点々とする」「飢えと乾き」「苦悩」「功積」「在存」「有秀」「洒好き」「境偶」「操り返し」

「洒落」を「洒落」と書く例はしばしば見たが、「酒」を「洒」と書くのは初めて見た。

- ③④南雲智「老漫画」―その刊行の意味(下)(「東方」二三八、二〇〇〇・一)

●「彼の才能を見い出だしたのは、この私だからね」

恥多きことに、小生も以前は「見い出す」と書いた。これでは「みいだす」となってしまっているので、「い」は不要と教えてくださったのは、数年前に退官されたK先生である。この「見い出だした」は、なんと読むのだろう。しかし、『辞林21』は「見出だす」、別の国語辞典は「見出す」となっていて見出しのたて方が違う。「出す」では「だす」と読まれるので、「出だす」と表記するようになったものだろうか。

- ③⑤青木玉「帰りがかった家」(講談社文庫、二〇〇〇・二)

●一二頁「父方の祖母は……阿弥陀さまに珠数をたよりにおすがりした。」

これも「数珠」が転倒している例。

- ③⑥「山村美紗サスペンス・検視官江夏冬子⑤」(HBCテレビ、二〇〇〇・三・六夜)

●「雌雛が朱に染まる時、天誅が下る」

「京都慕い雛殺人事件」という、いかにも作り話めいた事件で、「検視官」という偉そうな女性に届いたバラの花束についていたメッセージ。これを登場人物が例外なく「しゅにそまる」と読む。予告どおりに殺人事件が起こり、そばに置かれた雌雛の頬には血が塗られている。これは「あけにそまる」と読むのだ。「朱に交われれば赤くなる」からの連想か。

③⑦「党首直接討論」(NHKラジオ、二〇〇〇・三・八午後)

●「カラテンジテフクトナス」

党首討論は、クエッション・タイムと言うらしい。小淵首相は「禍」をわざわざいと読まずに音読みしたのだ。

③⑧「会議資料」(二〇〇〇・三)

●「張栩」(チヨウウ)

中国の留学生(同姓同名のプロ棋士がいる)の姓名。これに「チヨウウ」とルビが振ってあった。本人がそのように称しているらしい。栩は単独ではくぬぎの木の意味だが、『莊子』齊物論篇に、「莊周、夢に胡蝶と為る。栩然として胡蝶なり。」とあるので馴染み深い文字だ。栩にはク以外の読みはないのだが、旁だけ読めばウになる。このようにして慣用音が成立していくのかと思ったことだった。また、BS11(二〇〇〇・四・一五午前)の「囲碁・将棋ジャーナル」を見ていたら、世界囲碁選手権で芮迺偉選手が彦坂九段を破ったと報じていた。この芮迺偉を「ゼイノイ」と言う。芮を正しく読めるのなら、どうして迺(『新字源』には「迺」の誤字とある)を「ダ

イ(漢音) ナイ(呉音)」と読まないのか。当人が日本語音を知らないからといって、失礼なことには変わりない。迺をノと読むのは、曾我迺家くらのものか。

③⑨「女流王将・19の春」(NHKテレビ、二〇〇〇・四・六午後九時過ぎ)

●「万物生光輝」

連敗のあと三連勝して十八歳で初めて女流王将位を獲得した将棋の石橋幸緒さんが、母校の小平養護学校を訪問して後輩たちの前で講演し、校長室で揮毫した五文字。これをナレーターが「万物 生きて光り輝く」と読む。これは古楽府「長歌行」(『文選』卷二七)中の句、「陽春布徳沢、万物生光輝」(陽春 徳沢を布き、万物 光輝を生ず)に基づく。暉と輝は同じ。「暖かい春は、厚い恵みを行き渡らせるので、生きとし生けるものすべて、命の輝きをあふれさせている。」(全釈漢文大系『文選』集英社、一九七四)という意味である。ナレーター読みでは、「生きとし生きるものが生きて……」となつて、やはりおかしい。彼女は障害や病気を抱えて懸命に頑張っている後輩たちに、輝いて生きてほしいという願いをこめて、この句を選んだのだろう。感動的な番組だったので、目くじらをたてるほどのことではないのだが。

④⑩「あくぬきぬかの使用方法」(札幌市西区N食品産業株)

●「たっぷりめのお湯にたけの子と本品一袋を入れて、一〇〜一五分湯でるとあくぬきができます。」

雰囲気は出ているが、「茹でる」が正解。「茹」には、野菜、

野菜を食べる、ゆでた野菜などの意味があるが、これを「ゆでる」の意味で用いるのは我が国だけの用法らしい。

※蛇足〈其の一〉

札幌にもいわゆる新古書店が急速に増えてきた。ブック・オフだけではなく、古本市場や、ブック・オフとT屋が提携したブック・ワン、さらにはブック・マーケットまでもが登場した（二〇〇一年三月に厚別店ができて市内一二店舗になった）。狸小路のH書房の、シドニーオリンピックの期間は暇で暇で死にそうだったとほやいていた主人と新古書店の話をしたら、一万円の絶版漫画を新古書店の百円コーナーで掘り出したなどと自慢する客が増えたとも言っていた。また、近くにブック・マーケットができた白石区のS古書は、その余波？で、文庫本全点百円セールを開いた。そんな中、ブックセンターIの元町店が東区にオープンした。ここは百円コーナーに掘出物があつてあなどれない。地元の古書店の健闘を祈ること切なるものがある。

※蛇足〈其の二〉

前号に、拙著が旭川の古書店の目録に載っていたことを書いた。昨年十月、東京で開かれた日本中国学会に参加したおり、西早稲田の古書店街を廻ったところ、I書店の書棚に拙著があるのを目にした。カバーなしで、四千八百円也。どなたがお読みになったか、またもや気になることではある。

※蛇足〈其の三〉

前号で、「山積み」という言葉には違和感があると書いた。その後、古書店の百円均一の棚で見つけた高橋義孝『蝶ネクタイとオムレツ』（文化出版局、一九七八・九）をつれづれに眺めていたら、「後記」に、「人は字を、漢字を、漢字の音と訓を知らなくなった。とくに漢字の音を知らなくなってきた。たとえば近頃では『山積』という言葉を読みにして『山積み』などと言うようだが、『山積』は『さんせき』であつて、『やまづみ』というように訓読みにはしないのである。日本語は荒廃しつつある。」とあつた。以前から同憂の士はいただ。